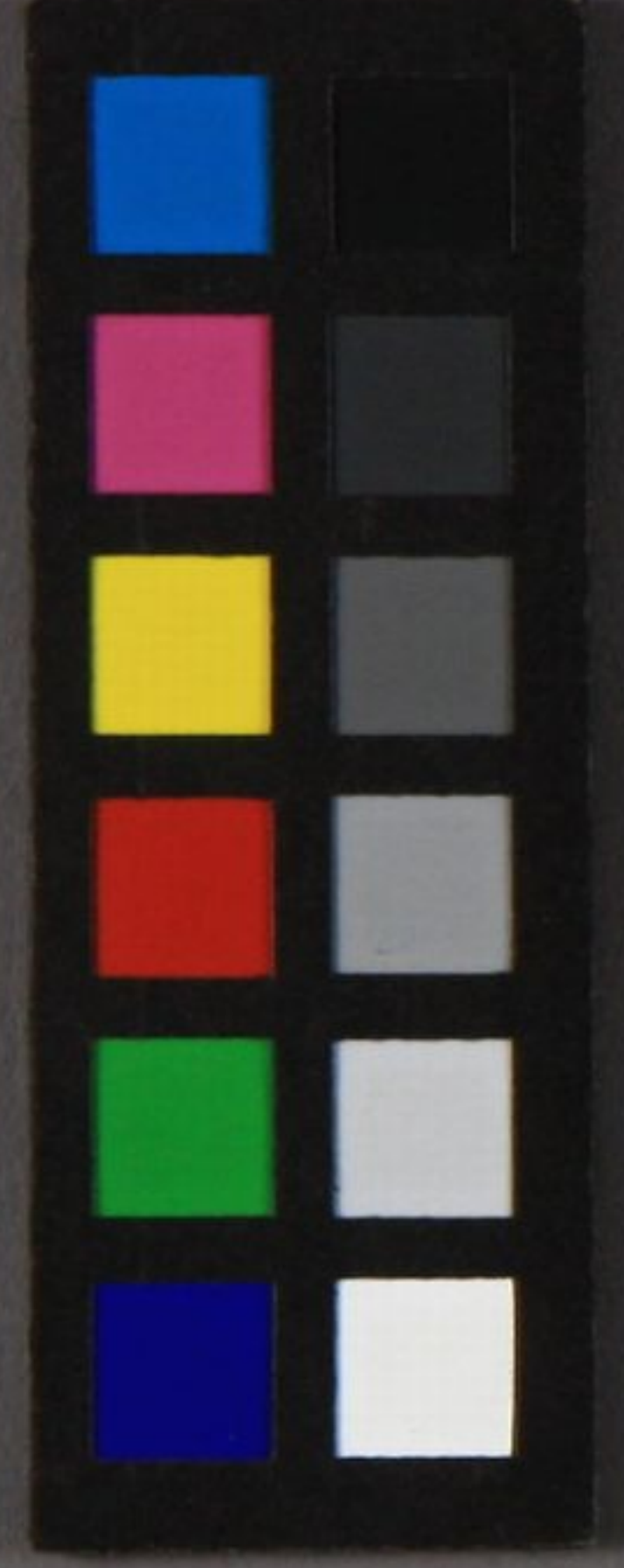


風台風の眼

緒方便一詩集





詩集  
颯風の眼

緒方健一著



1 9 5 3 年 刊



詩  
集

颯  
風  
の  
眼

緒 方 健 一  
フレイアド発行所刊



第一詩集

颯風の眼

一九四一 — 一九五三

夏  
秋  
冬  
春

一  
二  
三  
四



洞 雨 雨 雨 日 眼 眼 眼 樹  
 の の の 々 の  
 歌 歌 歌 の  
 窟 Ⅲ Ⅱ Ⅰ 歌 Ⅲ Ⅱ Ⅰ 液

目次

三 〇 二 三 元 六 三 八 四

北海道の野に 野兎や、えんどろや、少年たちに  
 圍まれて暮してゐる三谷木の実さん、あなたに  
 この最初の詩集を獻じます。  
 あなたは「夜の手」や「少年行」などによつて抒  
 情詩の美しさを知らせてくれましたし、またそ  
 れからの文通が、柳川時代のほくにとつてどれ  
 ほどの喜びであつたこととせう。



冬の薔薇  
 歌 I  
 歌 II  
 ぼん・そわーる  
 旋律  
 夜の街で  
 手紙  
 教會の午後  
 ロマンチズム  
 花  
 墓  
 タベの歌

三 四 四 四 五 五 六 七 七 七

△お詫び▽

はじめて 自分で自分の詩集を刷つた爲、つい疲れた時など校正を怠らつて、左記の誤植を生じました。恐縮ながら正誤表の如く御訂正下さる。

正 誤 表

頁數	正	誤
17	最終行 準備しなければならぬ。	ならぬ。
38	7行目 どうにもしないうちに	どうにもしないうさに
52	8行目 臭いが流れ	臭いか流れ
62	8行目 マリアさまは淋しい。	マリアさまは淋しい。
69	最終連2行目 きいてみたい	きこてみたい
77	4行目 海邊の貝殻よ	海還の貝殻よ



神話  
冬の日記から  
午後  
ロジック  
回想と海  
若き日のころは  
春 作品六番  
風景  
眼 IV  
あとがき

104  
100  
九七  
九三  
九一  
八八  
八三  
八一  
七九  
七五



樹液

野のコスモス

穹の残照

濡れそぼる新緑

それら美しいもの

それら美しくはかないもの

記憶の底に沈んでしまつた

印象にしてもはかないもの

それらを

碧くインクの染のように滲ませて

ぼくの前額の奥にひそむ吸取紙よ

時間の観念を越えて

構成されないで構成された

ポワントイストのタッチのように

いつしか脳髓の汁で絵が出来た。

それは霧の中の風景のように

はつきりと説明することができないが

樹液のように生きて

ぼくの感情の一端を構成した。

わざとらしいスタイル



着色された物象

でまかせの言葉

それらすべて不自然なもの

それら虚構のまやかし

それら

相反するものすべてに対して

夥ただしい嫌悪の情に

樹液は濃く苦味をおびてくる

だが その絵は誰の眼にも見えない。

あなたのまどわしの眸

あなたのきらびやかな唇

それらあなたの素顔でないもの

素顔でない作られたもの

それらを

純粹ならざる虚飾と知りながら

ぼくの犯罪の掌や慾情の泉が

虚榮の沼へ共に脱出をこころみる

それらに対して

黙つて眉をひそめる

唯に無力な碧い印象画

唯にふつふつと

苦汁に満ちてくる樹液。



眼  
I

颱風の眼

といつた純粹な碧さについて考える  
それは放射状のトンネルでありました  
すこしばかりピントのはづれた  
孤獨な神の抜け筈でありました

ピカソの女の顔の習作

の中のキラキラした涼しい眼

の中のファンタジア

さかさまの椅子の上のミカン箱  
の上にペラペラの花模様のレーヨンを敷いて  
自己陶醉に睡つてゐる人の  
枕もとに風が強いノックをおくると  
たちまち自信はぐらぐら  
空洞に藁をもとめて踊るばかり

純粹な碧さとは

自己喪失の空白状態でありましたか  
顫えてゐる心臓から押しだされた



こめかみにふくれた静脈の色でありましたか  
濁流に似た欲望の渦巻こそは偉大でありますな

根なし草の誇張された理想は

タンポポの穂のようにとんでゆけ

どうせオイラは風まかせ

條件次第ぢや芽もふこう

M 染料工場を横切つてゐる河

この汚水の流れを

住民は(七彩の河)といいますが

(文明)というエタイの知れぬゲテモノが

極彩色の尿のような死の水を流す  
アジサイの甘さなんて微塵もない  
これが二十世紀の色彩です

煤煙という氣流の中に埋もれて

颱風の眼

といつた原始的な純粹さについて  
息苦しくなるたびに

天への階段かのように

柄にもなく

渴望したりするのです。



眼  
Ⅱ

眼

その眼は風の中にさまよい  
夕空の果てに にぶく光る  
ぼくらの仲間の死  
はそんな時刻の  
ものさびしい共同墓地の柵の中に甦える

肉体を喪くして

眼ばかり星のようにきよろつかせてゐる彼ら  
かなしいな  
月も見えがくれして哭いてゐる

今宵の月は蒼褪め

憑かれたように犬が吠える  
vieの犬……それほど氣取らなくても  
遠吠えは 壓迫感への虚勢にすぎない

夜更け

すべての影はあやつり人形のように



ほそく 頼りなく ゆらゆらと揺れて  
ミイラのような後ろ姿の  
なんと彼奴に似たことか  
聲をかけてみたいような――

眼

空からたたりとぶらさがつて  
朔風に吹かれて  
さびしそうに夜の地球を眺めてゐる  
仲間の眼をぼくは視た  
―― 浮ばれませんね。  
―― 死にきれませんね、君。

その眼は

いつまでもぼそぼそと呟いてゐた。



眼 Ⅲ

燈台は海の腫である

海の腫は荒れた波の感情を照らす

貴女の眼は濡れたサファイアのひかり

その眼は穢れない泉である。

死魚の眼をした大人たちの片隅で

貴女は泣かされてばかりゐる

その時 泪は眞珠のように光る

流された泪があなたの心を洗うので  
あなたの弱い胸は汚れることがない  
その眼は泉  
泪は海洋へそそぐ一滴の清水である。

泪はひとつの怒り

泪はひとつの抵抗である。

あなたはしばしば泣く

戦争があなたを哭かせた

裏切られてあなたは泣いた

結婚によつても

あなたは多量の泪を準備しなければならいな。



そうしなければもう洗えない。

澄んだあなたの瞳

その眼は砂漠のオアシス

しかしその泪もいつしか涸れる

その眼はもう泣かなくなる

そうしてあなたは墓地へ行く

その時

誰があなたのために哭くだらうか？

### 日々の歌

昨日のぼくは曳かれてゆきました

なにも犯しはしなかつたのに

すこしばかり夕暮はさびしかった

月が蒼い涙を流したので

背信のことばを呟いたかも知れないけれど

すべては向うから背いていつたのです

いらだたしい人生の中で



裸のダイアナと鹿とはぼくのシンボルです。

ギリシャの神話をお読みですか

牧童は牛をねぐらにおくつてから

アルタイルとおしやべりをするのです

エゴイストたちの眸はムチのように冷酷だから

人里放れて雑草の中で

ミルクの河を好むのです。

ぼくの罪は金儲けがまづいこと

それでも商賣人は星になれません

貧しい娘たちでさえ昇天したというのに。

アルキメデスは真理のために殺されましたが

ぼくのような弱虫では

黒い御手も問題になどしないでせう。

ひるまはそわそわして過ぎますが

夕べになると原始人の昔にもどります

その時 夜はひとつの人格でした

つまり獣の感覚ですね。

喪の中に沈んでゆく窓にもたれて

川音のかすかな吐やきのなかに



くづれてゆくセコンドの悲哀を聴くのです。  
そして悪徳の呪咀に支配されて  
黒い歌のリフレインの中から  
明るい光線を吸つて覚醒るのです。

## 雨の歌 I

雨はけぶる巷の雑踏に  
舗道はくらい鯨の郷愁  
単調なリズムが  
はるかな南への幻覺を呼ぶ。

石と神話の國ギリシャ  
夏季には雨が降らないその國へ  
雨は連想を呼んで降る



いくたびも夢を彩る

アクロポリスの丘よ

泉よ、オリーブと月桂樹よ。

風俗の國ギリシヤ

△水の祭り▽の豊か風習よ

ニンフは浴みする

アルゴスの娘　ダナエ

きんの水になつて愛を告げたゼウス

そのロマンスよりペルセウスは誕れた。

私の愛する数々の神話にふくらむ國よ、

水は乏しくとも

乙女の舞う白いヒトンのひらめきは  
噴水ふきずとなつて穹に散りこぼれる。

デメテルよ、

萌えいづるものの女神よ、

娘戀しとわが故郷をさまよえ

雨は涸れ　草木も枯れる。

さればジャパンの國の人々も

水にあこがれ

そのかなしい願望が



美しい傳統となつて  
心をしつとりと濡らすだらう。

雨の歌 Ⅱ

先刻さつきからつづいてゐる夕闇の會話

のむこうにしづかに窓をうつ雨  
はるかなさきの微光に沈んでゆく街

夜の中で街はあぢさいの花のように美しい  
やわらかに雨を彩る家々の灯 ネオンの灯  
街は一莖の花のように風の中で揺れてゐるのであらうか  
揺れてゐるのは街ではなくて不安な人間のころである

ときどき高架線のあたりで流星のようにスパークする  
閃光を発するのは電流のせいではなく  
世界の不穏な言葉が針のよう突刺さるからである



やがて△今日▽をあきらめた人々が去つてゆき  
深夜 すべて之音響が死んでゆくときにも

反対側の地表では銀いろの蜂が製造されてゐることが  
ひとびとの臟腑を不安定に揺すり

眠れない夜に亡びた者たちの聲をさくのである

窓を打つ雨の音にまじつて

誰かの聲をきいたのは錯覺であつたか

かなしみの記憶がまだ消え去らぬうちに

女たちは再び喪服を縫いはじめねばならぬのであらうか

ひとびとは疲れはてて憩いをもとめ

雨はさりげなく屋根と屋根のあわいに降る

降つてゐるのは雨ではなくて泪であるかも知れない

ひとびとはいつとはなしにその単調なひびきに聴きいるからである

希望ほのかな△明日▽への懸橋を渡るからである。



雨の歌 Ⅲ

雨の軒に吊された籠の中の小鳥

歌いつづける愛の歌

小鳥の眼の中のこびとのぼく

金網を透して濡れている若い緑

塀の向うの女学校

湧きあがる乙女たちの笑い

制服の娘たちは美しい

白い服をまとつたナースの美しさに似ている

ナースは病的な眼に寫る白い部屋の白い蝶である

白い服を脱いだ彼女たちの私生活の乱れ

制服につつんだ娘たちの胸のふくらみ

彼女たちの笑いは童女の單純なそれではない

意識の中に制御しきれぬ甘い蜜の滴たり

雨に濡れてゐるコスモスの方が美しい

かすかに響いてくるピアノ・ソナタの方が美しい

△エリザのために▽ みにくい音楽家の若い日の慕情

雨は並木を濡らし 赤いポストを濡らす

雨はメランコリックな感情で大地を濡らし 河となる

河のむこうに海があることは美しい

鉛色の空のむこうに青空がある



そう考えるより海を想い描く方がはるかに美しい  
濱邊であそんだ少年の夢が滲んでゐる  
ナイーヴな魂が水に戯れている  
さらさらと掌を墜ちる砂粒の美しさ。

洞窟

雨の中に人は出ていった。

洞窟のように暗い  
室内に燻る私の孤獨  
固いデスクの上の散乱した帳簿が  
ビジネスで私を縛る

△海邊の墓地▽はひそかに撮やく  
古代アルタミラの洞窟の壁画



その水牛から美意識は傳承されたが  
ほの暗い壁を飾るものは

△ 發動機 V のポスターとユトリロの複製画

磨かれたダイナモの非情の意志と

無能者のかなしい愛と色彩

そこに生れるマイナスの倫理

デモンよ カリュプソの魔女を殺せ

オデッセーを解放せよ

足枷に咆哮するわれらの自由

囚はれた虎は吼えるほかはない。

雨の中に出ていつた人の

蒼褪めた焦燥も濡れて泣くか

窓をあければすべては洞窟

その暗さに雨は轟き

地平の涯に雷は吼える

ここにも足枷の虎が

火を噴いて怒り燃焼させる

静脈が焰のようだ。



冬の薔薇

新宿

その雑踏を吸いよせる  
驛の構内は電機掃除器のようである  
凍てつく舗道に涸れた乱打を伝える  
その靴音のコーラスの中に  
ぼくはいきなりぎゅーんと胸を締めつけられた  
吹き晒しのコンクリートの壁にもたれて  
すすけた五十男が蹲つてゐる

その膝に抱かれて睡つてゐる女の子

寒さにむづかり胸にすがる

可憐な薔薇

その幼ない蔓の繊さが痛い。

今頃は待ちくたびれて

眠つてゐるであらう 由紀子よ

同じ年格好の女の子が此處に居る

この痛々しい光景をのがれて

ぼくは泥棒猫のように人の流れに消え失せた

おみやげのケーキを掌にさげて。

風の夜をひたはしる電車の中でも



その光景は棘に似た傷痕をのこした

△ケーキはあの娘にやるべきではなかつたか▽

△そんな博愛主義どうなるというのか▽

ふたつのことばが傷口に刺さる

博愛主義でどうなるものでもない

そうして誰もどうすることもしない

どうもしないうさに多分女の子は死ぬかも知れぬ

ぼくはアンデルセンの童話を想い出す

あのマツチ賣りの少女のこと。

翌朝 おいしそうにケーキを頬張る

由紀子のあかい頬つぺたを嘖めながら

拂つても 拂つても

原爆被害の影のように

胸幕に焼きついてしまつたあの光景。

臆病な僕 旅びと

ぼくは路傍の通過する眼にすぎない

しかし生きて苦しむより

むしろ幸福な死である と

誰かが言つたとしても

夜の薔薇のように睡つてゐた少女よ

絶望の生も まだ花の薫りは失くさない。



歌 I

原つばでうたつた  
聲はかなしみの笛  
一本の銀杏の樹の蔭  
雲はながれ  
風は梢を吸いよせるように  
はるかなガードのあたり  
レールの軋る  
朝のように冷酷な響きが

孤獨をきびしく刻印する

髪に降る枯葉

おもえば人の命もこのように

△もう決して離しはしない▽

荒廢の地にバラツクの建つ頃

妻れはてたあなたは還つてきた

△いつまでもいつまでも▽

△もう別れわかれになるの死んでもいや▽

とりすがつて泣いた胸の厚みと硝煙の匂い

それからバラ色の朝あけと

スマイレ色した暮れ方の

祝福された短かい歲月よ



△せめて一坪でも僕たちの家を▽  
△屑拾いしたつて生きていけるわ▽  
笑顔でくちづさんだ歌の一節  
そしてあなたはハンドルを握つて  
そして線路を染めたあなたの血  
あの血なまぐさい戦さでさへ  
裂きえなかつたふたりなのに  
人の命なんて脆いもの  
丘の上の木十字架  
あれからの太陽のない日々  
わたしのまえに展がる灰色の未来よ  
わたしはもうじつとこのまゝ

銀杏の落葉に埋まつて  
泣きぬれてうたうあの一節  
歌よ 風に消えてゆくのか……



歌

Ⅱ

ふるえる芯

とびたつ雲雀

消えのこる草の露

ゆるやかな朝餉の煙りに

眼醒める村の

水車は廻る

そんな風景は

絵空ごとのように

とおい 揺籠の子守唄

ぼくらの歌は考えることば

ぼくらは韻を忘れる

現実の血の流れにうたう

一昨日 肩を組んで合唱した友は

昨日 北海の孤島に斃れ

今日 新らしい友とコーヒーを啜る



神よ 神よ

あなたの不在を告げる不協和音が  
廣告塔下に佇ずんでいるように  
三半器管を脅かすのです

平和は懶惰な休息に過ぎないと  
雄叫びあげる人々には  
黙つて處方箋カルテを書きませう

みんな輪になつて踊る  
掌と掌の温もりが情感をささえる

唇をもれてくる鄙びた歌

丘を越えてくる歌ごえは  
御詠歌のようにさびしい  
華やかな歌も何となくさみしい

愛することの不倖せ  
憤怒のリクリエーション  
笑うことの空虚さ

理想の設計図胸にあつたが  
雑踏の中で失くしてしまつた



残されたのは請求書ばかり

風の痛さに耐えてゐる

固い蕾の稚なさに

仄かな明日への期待がある

忘れよう すべてのことを

いゝえ 齒がみしても忘れてはならない  
唇に自然に微笑湧く日までは。

ぼん・そわーる

ぼん・そわーる

ぼん・そわーる

暗い露路の向う——

明滅する舗装道路で

言葉かわして過ぎていつたものは 誰？

酔いどれ ひとり

鯁えた溝の流れ



どぶ鼠をさえぎる老朽の木片

—— びたこん びたこん

梵音は不規則に響いては消えていつた。

汚みついた貧の匂いは

瓦斯のごとくにたち罩もる

うらぶれた日雇いのしびれる疲れ

そこいらでひつかけた(ちゆう)の一杯はよく廻つた。

—— 闇に浮ぶコスモスの白い花よ。

ぼん・そわーる

ぼん・そわーる

おぼつかない片言を呟いては  
鳥打帽ハンチングを振りふり 酔いどれは消えていつた。  
可愛い餓鬼どもの寝顔で胸を一杯にして——。



旋  
律

夜更け

狂奔する急瀑のように

湧き上つた ピアノの弹奏

たとえば 狼を見た猟犬のような

憑かれたものの悲鳴に似て

そこはさびしい裏小路

黒い板塀には蔦薔薇の手ざわり

どこからか 消毒液らしい臭いか流れ

暗鬱な感じは 夜のせいばかりではない  
老樹の幹に 屈折した洋燈の翳がにぶく  
佇まる僕の 三半器管に傳はる旋律は  
どうやら リストの「死の舞踏」らしい  
バツハヤ セザール・フランクの

あの 静謐典雅な曲ではない

冴えた音色ながら

ひどく乱れた息づかいが感じられて

たちさりかねるところで

藪蚊のうなりをきいたのだつたが――

夏も終りの ある日



灼けつく日射しのなかで  
黒塀に 悲しい貼り紙を視たのである。

### 夜の街で

オーバーの襟をお立て  
莢のようなものの降る  
冷たい戦慄が脊柱に泌みとおり  
かなしみをさらにあらたに  
錐やドリルで追憶を剝る  
ドーバーの岸邊によする  
白い波のしぶきにぬれて  
ふりあおいだ北<sup>ヘク</sup>十字星<sup>メス</sup>のわかれ



女よ 誰も知るすべもない

鳩尾みぞおちの秘めた血の動悸に

紫班の痛みを呼びさまそうと

冷やかな雪まじりの水滴は泌みてくる

オーバーの襟を立てて

異國人のように街をお急ぎ

あとを追うような沓のひびき

あれは誰でもない

あなた自身の影なのだから

かすかに覗く電燈の光りや

どこかできこえる囁きや

とおくのほうのさんざめき

そんなものへの未練を捨てて

ただまつすぐに家へとお急ぎ

よしんば寂莫の孤が待つばかりとしても

今日は何も考えないことだ

だまつて眠りの中に憩うのだ

夢のなかに展がる美しい思い出の中に……。



手紙

庭の矢車草が咲きました。三つの色に染めわけて、わたしの  
のころそのままに。拙ないスケッチに、つけ加えるのは無  
駄なこと、花のことはをお読み下さい。しばらくお逢いでき  
なくて、寂しい想い——薄むらさき。人知れぬ慕情——うす  
べにいろ。わづかばかりの緋のいろは、ひそかに炎えている  
わたしの心のシンボルです。多分あなたは、平凡なとお嗤い  
でせうね。平凡な人生、静かな生活、そして暖たかいころや  
り、それが一番倅せな。そうはお考えになりませんか？あなたは

こうおつしやるかも知れません。世界のたそがれ——薄紫。  
血汐の褪せた人間たち——うすくれない。そして、カーマ  
インの花びらは、僅かばかりの、理想に炎えた、若い心の焰よと。  
わたしは政治はいやなんです。あなたとわたし、そして、わ  
たしとあなたのお友達。あなたはこうはおつしやいません。  
世界中の人間の、その中の日本人、その中の君と僕だと。同  
じことを裏返し、それからこぼれる言葉と言葉。ですから今日  
は、矢車の、花びらのひとつひとつを、心をこめて淡彩し、花が  
あなたへ語るでせう。



教会の午後

鳩のようにくうくと啼く

△内心の苦悶▽

去勢された人間の聲

ひとりの聖者

彼の見苦しい偽善は蛭蝮のように

鹽を撒くことによつて消える

讚美歌の舌足らずな歌聲は

微温湯のように彼らを養う

女たちは囁る

まひる 樹蔭のサロンは

小鳥店のようだ

出かけ 彼女らはいつまでも鏡を磨いてゐる

「きつと この鏡は曇つてゐるんだわ」

公園のわきのアパート

ひとり娘のゐる窓硝子に

男の翳が動いてゐた

それだけのことを

いつまでも 牛の胃袋のように反芻する



だからコンパクトの鏡は  
唇だけしか寫さない  
あゝ 温室の華やぐ薔薇  
彼女らに微笑はあるが根がない  
チャペルの鐘が鳴ると  
七面鳥のように淑やかに  
扉を押して木のベンチに坐る  
ステンドグラスのマリアさまは淋しい  
そこで司祭は 猫撫声で 説教をはじめる。

ロマンチズム

ジュヌヴェイエーヴ  
という ひびきのよいことばが  
わたしに秋を想はせる

ジュヌヴェイエーヴ  
小川のやさしい囁きが  
沁みとおる春の朝や  
鍋底も焦がすような太陽が



きんのふいごを噴いて消えていつた 夏の夕べに  
そう呟いてみると

なつかしいひとのように

ラ・セーヌの古本屋のある河岸

フォンテンブローの楡の小路

葡萄の熟するル・ミデイの村落の

水車は廻る 朽葉色の土手のあたり

翳のある風情で 佇む

驚いろの眼 の女を想い描くのです

ジュヌヴェイエーヴ

と いうアクセント は

秋 を連想させます

ことばは霧のたくみな演出法を勉強しました

NUKADA - NO - OHKIMI

IZUMI - SHIKIBU

IZUMO - OKUNI

YOSANO - AKIKO

KOSHIJI - FUBUKI

才女はあでやかなオペラートに包まれてゐます が

その中身が腸詰ではない と

誰も保証してはくれません

すべての失望を味はいたくなかつたら



オブラートは破らないことにしませう

Autumn

それから

大寒 小寒

山から小僧がとんできた。

## 花

花 のこころに わけいつて

無色の雫 蜜の匂い

蜂 はさもしい おのが姿に

ばらいろの 頬に 掌を合はせ

泣きたい想いで 胸が一杯

つらい 浮世の 風にまかせて

稼がねばならぬ 種族の

センチな涙は 禁物



サナギのためには 盗み も辞せぬ

×

花よ

花は 誰のものでもない

お前自身のもの

美 のシンボル

朝陽に 無心に わらつてゐる

唯 そのことのため 純情のため

風 にそねまれ 雨 に叩たれ

咲いた ばかりを 手折られて

晒し首 に された。

×

花 のところに わけいつて

きこてみたい 囁き

ニムフ のように 清らかな

それとも 乙女の 乳臭い繰り言？

わたしのアフロデーテ に きいてみましたが

そしらぬ顔

蜂 になつてみたいような

むせかえる 春の花園で



モグラの ミイラに 蟻が蝟集し  
うすい汚物と 化学肥料で  
花は ますます 美しくなるばかり。

## 墓

ひとが ビルの回転ドアをすり抜けると  
いきなり 正面の凸面鏡におしつぶされる。  
まるで墓だ。

蝶ネクタイに縁なし眼鏡。

エヴァグレーズに雀の巣。

蓮の露の白いバッグ。

カミかえれば なおさらに

脚をふんばつた 墓そつくり。



——それが人間本来の姿であることを告白するように、  
鏡は テロリストのように手荒い。

墓は心象のレンズに タラーリ タラーリ。

——臓腑には欲望の汚物が一杯つまつて、

——神さま。 何というひどいことを……

纏つた衣装だけが 美しくとり澄ましてゐた。

## 夕べの歌

芒のしげみに

しのび泣く虫の

エメラルドの血はふるえ

絃奏は 地殻に沁み透つてゆく

幻の地層をめくれば

きつね猿から分枝直後の

おぼつかなく原始林を彷徨した

直立猿人の群れよ



落魄の 秋の夕べに

熟れ落ちた木の實などに飢をしのぎ

野獣の叫びに寄りそうて慄えてゐたか

その時 叢でエレジイは奏でられてゐたか

軽い震動に虫の音を消して

バスは オレンジの眼をして近づいてくる

ゆるやかに停車したバスから いくつかの影が吐出されて消える

ひとり クッションに身を沈めた若い女の

裏れてみえるうなじの白さ

洋燈の影に滅びゆく蛾のような

さようなら 未知の女よ

花のような傷痕をのこして

視界から 緋色の尾燈は消えてゆく

そこで又 ぼくを無視した音楽會がはじまる

とおく チャルメラの音もさみしい

秋の俳優 月よ

痘痕づらの天使よ

妙にセンチメンタルな蟋蟀どもが

こころの片隅ですだくので

あなたの顔も翳りました

と 風が傳えていきました。



神話

神々は死んだ、僕の胸で。

ひとの愛に虚榮ふくまれ

微笑の翳に憐憫ひそむときに。

牧師の唇に金齒光るときに。

そしてふたたび新しい神誕れるか？

今宵 ギリシヤの神話がなつかしい。

鹿とともに駆ける裸のダイアナ。

ジュピテルの娘 アテナイよ。

春は南から笑ひさざめきながら来る。

雨はニムフの浴みせし水滴を撒き

海還の貝殻よ、 ヴイナスを孕めかし。

何時よりぞ、 胸裡に牧神の住みてあり

南より ギリシヤの歌の訪ひくれば

ひとならぬ女神を戀ひ、 女神ならぬひとを慕ふ。



冬の日記から

突から雪になる。

そら いちめん

小蠅が乱舞したような穢ならしさ。

薄汚れた 点 点 点 点 が

押しあい 犇めきあいながら

地上めがけて殺到する。

その奥の 朦朧たる薄明。

雪は半開きの不活発な街に、  
雪は寒々とした開墾地の上に、  
雪は鉄橋を慕進する機関車の上に、  
すると いかにも美しく清らかだ。  
あの ボロボロの衣装をいつ脱いだ。  
シンデレラに紛うあざやかな変貌<sup>メタモルフォーゼ</sup>。

それは光線の轉位に過ぎぬ というのか？

せめて もうすこし 潔らかな 社會を

形成しては どうですか！

と

とおい 星の共和國から



おくつて来た 愛のたより。  
雪は白銀を重ねて降積む、  
それを容赦なく沓跡が踏みにじつてゆく。

午  
後

I

桑の葉のゆれる午後  
さりきりと帆を捲けば  
飛沫しぶきをあげて窓に溢れる秋のそら  
杳く ヨツトのように 一点の雲が流れる

II



ユウカリの樹の下で  
あなたの微笑が柘榴のように光つた  
絵日傘が田い田い島をつくるので  
僕はモネよりも幸福に ポツピーオイルの匂いを嗅いだ。

■

児童が露地に溢れだすと  
低学年の教室はがらんどうになり  
コスモスの揺れるコップのそばで  
若い先生は 光の波に船を漕いでゐた。

ロジック

ぼくの愛  
ぼくの憎しみ  
ぼくのひそやかな笑い

すべてはオブジェへの距離である  
すべてはあやふやなマジックである  
君と僕とは等價である  
すると すべては量らねばならぬ



ぼくと対決する社會

ぼくを否定し去る社會

左右には親しい友がある

左右には怖るべき敵がある

前後には蕃殖の血がながれる

前後には因習の腐れ縁がある

ぼくはマジックの中に逃避すべきであるか？

むかしは純粹な神話があつた

人と獸とは等價であつた

白鳥は羽毛を捨てて

戀を戀する娘になつた

ぼくらは蛇の末裔である

魚類はぼくらの祖先である

そこで 鱈の頭は貴重になる

唯物論と相対性原理

それは十九世紀の神話である

廿世紀には神話がない

不條理という壁の中で

あをい人間たちのルーレットあそび

曇天の下で

太陽は永遠にない と断定する心理



ながい間の 白夜の季節

青かびの生えた借物のロジック

誰もが日光浴を必要とするらしい

蒼い顔を灼かねばならぬ

生白い思想を灼かねばならぬ

すべての脊骨を灼かねばならぬ

人間は石である

石は蹴られる

石は碎かれて砂利になる

砂利は川原で陽に灼かれる

狭い部屋の中の群衆の叫び

広い部屋の中の哲学者の呟やき

すべてのロジックを天火にかけよ

灰にして 宇宙の外へ吹上げよ

ぼくは笑へない

ぼくは憎しみを忘れる

ぼくは愛を捨てる。



回想と海

― 漁り火の沖へととほく漕ぎて出でぬ

有明月の寒きあしたに ―

白秋の生家の 古びた酒倉の近くの

病身の少女がうたつた歌

バスは駆けり すぎゆく昭和橋

窓を叩く暮色の風と

寒々とした 品川沖の海

海は剝るようにひたひたと僕の心に波打つ

僕のうぶすなは長崎港の潮の中

赤いヱイトと 翔びたつ鷗と 青い海と

けれど 品川沖に波立つを見れば

妙にねばりつくようなつかしきで

有明の鈍い海のいろと 少女の歌を想い出す

ふるさとはなつかしいばかりだけれど

寄港地は複雑に濁つたエッセンスで

得体の知れぬ丸薬を嚙んだように

苦い笑い すつばい唾液

まあ悪いことばかりでもなかつたさと

そう呟いてみても

ハヤシフミコ的な魚貝の町 沖端



タルチユフ的な商人の町 柳川

嘔吐をはくような不快さがこみ上げてくる

僕は單なるエトランジエにはなりえなかつた

あの田園を吹く水色の風すらも……

あばよ 僕の青春 僕のスーベニール

風の中に

來曆は 紙吹雪のように散らしてしまえ。

わかき日のころは

わかき日のころは

はかなく散つた山吹のはなのいろ

川にこぼれて

杳く 過去へとながれ去つた

あとに瀬が歌つてゐた

みづいろに濡れた鈴の音色して

その聲の小さく

その響きのなつかしく



底の方には混つたものもあつたが  
皿の上のビーズの踊りのように  
きらめいてゐたのは  
碎けて散つたガラスのような純情  
掌に掬えば  
黙りこけた青い液体。

春 作品六番

青い堇

黄色い堇

バンジイ

堇の露を瞞めてゐた

稚ない春の陽炎

仄かな夢も無残に散つた

めぐり来る 春いくたび



野の花 歌う小鳥  
すべては同じ走馬燈

何故泣くの

微笑むつもりだつたのに  
しめつぽい風が吹くので

泪ぐんだあの娘の

可愛い唇のゆがみ  
ゑくぼばかりが氣になつて

お濠の青さ

芝生の青さ

オフ・リミットの青さ

春は フランネルを着た  
微熱のある病人のように  
たよりない

やわらかな光の波に

水色の風船を放す

どこまでもとんでゆけ 軽い夢よ

白い卵の影



ビルディングの反射  
塗りたての壁

固いコンクリートに  
ボールを叩きつけようか  
爽快にはづむならば

酔ひどれの太陽が  
屋根屋根の涯に墜ちていつた  
街は抒情詩を書きはじめる

うら哀しい春の宵よ。

風 景

鉛いろの倦怠が流れる  
ぼくの脳髓の鈍いセンチメンタル  
ガラスに反射する意志のない光り  
樹々に奏でる風の楽章

ハネ橋のあるゴッホの風景  
明るいモネの『断崖』のタブロオ  
いづれも眩しくて眼に痛い



ぼくの思索器管は嘔吐を吐きそう

この完成された自然の展望

缺点のないのが最大の缺点

ぼくはアポロ的全圓は望まぬ

むしろピンボケ映画のなつかしさ

天上の灰色のガウン

吹き捲くられてゆく白い蝶

閉じられた扉を叩く 濡れた掌

—— 傾斜したぼくの索める額縁の絵よ

やがて氣層は山脈からくづれてきた

ぼくの脳髓に翳る不連続線

かすかに聞えるニンフらの楚音よ

濡らしてしまえ 濡らしてしまえ すべての風景を。



眼 Ⅲ

その眼は僕の脊中に

その眼はあなたとうなじのあたりに

その眼はわれわれの背後から

鋭く注がれる。

不図 誰かの視線を感じる

見廻しても 誰もゐない。

曲り角で 氣忙しく振りかえる

しかし 黄昏るる並木のみ

ショウ・ウインドウの中の僕の顔

の中の他人のような 凍る眼。

いつも 背後の眼を怖れて

落着きを失なつた人々の流れ。

その眼はどこにでも潜んでゐる

メトロの中でも

ムービーシャッターの中でも

風に鳴る 郊外の藪の中にも。

銃眼をのぞく眼



捨て科白を投げる眼  
血走つた勝負師の眼

の中にもある

僕や君やあなたに隠された

尾行者の眼

密告者の眼

いやらしい しよぼしよぼした

生きるための眼。



## あとがき

この最初の詩集に纏めた作品の大部分は既発表のものでありますから、この詩集は単なる記録に過ぎぬかも知れませんが、一應この邊でふりかへつて見ることも必要だらうと思いました。振返つて見て、ぼくの詩のスタイルが舊いことをつくづく感じます。

センチメンタルな流れの根強さを感じます。しかし、ぼくが念願する、抒情と批判精神の結合、というテーマが、少しでも満たされてゐればそれでよいと思います。これらの作品は、一番舊いものが「神話」の一九四八年三月の作であり、最後の「眼 IV」(一九五三年三月)に到るまでの三十篇を、製作年月とは関係なく好き勝手に配列したものであります。ぼくの詩の弱さを云々

する人がありますが、その弱さの中に、ある強靱なものを持つてゐるつもりであります。詩が讀者に押しつけがましい態度で書かれることには反対であり、ある事象を飲込んでそれを内燃させ消化し、ひとつのイメージとして表現してこそ、詩は讀者の心に沁み入るように響くことが出来るのだと信じます。まだぼくの考える詩と書くものとを合致させることは仲々出来そうにありませんが、ぼくの信ずる一筋の道を進んでゆくつもりであります。

x

x

この厳しい時代に、生きる悦びを共にする親しい友たち、プレ  
イアドの仲間たちと地球の諸君——あなた方に心からの挨拶をおく



ります。又△蠟人形▽で御指導給はつた西條八十氏、△詩学研  
究會▽で暫くお世話になつた村野四郎氏をはじめ 諸先輩に遙か  
な敬意を表すると共に 今後の御鞭達をお願いする次第です。



詩集 颯風の眼

0328

頒價 160圓

東京都品川区東品川4の94

著者 緒方健一

東京都品川区東品川4の94

印刷者 緒方健一

東京都世田谷区野沢町1の222

発行所 プレイアド 発行所



弘南堂書店

TEL (711) 9429  
サッポロ・北大病院前

2500